

## 聴き手の想像力を超える表現を：二神二郎先生との1つの対話（特集 二神二郎先生への感謝をこめて）

著者	二神 二郎，渡邊 康，宮田 俊雄
雑誌名	椋山女学園大学教育学部紀要 = Journal of the School of Education Studies
巻	14
ページ	13-15
発行年	2021
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1454/00003052/">http://id.nii.ac.jp/1454/00003052/</a>

特集 (Special feature)

二神二郎先生への感謝をこめて (Happy retirement of Professor Jiro FUTAGAMI)

# 聴き手の想像力を超える表現を

——二神二郎先生との1つの対話——

**Aim for musical expression that exceeds the imagination of the audience!: An interview with Professor Jiro FUTAGAMI**

渡邊 康<sup>\*</sup>  
WATANABE, Koh<sup>\*</sup>

宮田 俊雄<sup>\*</sup>  
MIYATA, Toshio<sup>\*</sup>

キーワード：3分間の音楽表現，想像力，意外性，聴き手，イタリア，オペラ

Key words：three minutes musical expression, imagination, surprise, audience, Italy, Opera

——演奏することにおいて心掛けていらっしゃることをいろいろ印象深く教えていただきました。その中でも「聴き手の想像力を超える表現」についてさらに教えてください。

二神：人間は正直飽きやすいですよ。楽器によって例えばピアノなら1時間とか30分とかの演奏時間がありますけど、我々の歌は3分で表現しなきゃいけない。ですけど、その3分でも聴き手は飽きてします。あれはなんだかんだと考えてしまいます。そこでこの3分にいろいろ詰め込まなきゃいけない。だけどその表現がストレートだと聴き手はもうすぐにあれこれ考えてしまいます。3分でもお客さんは飽きるんですよ。そこで私はその3分を飽きさせないように、常に思っています。とにかく表現の色を変える、あらゆることを3分に詰め込む、あとは長いことやってきて最も大事と思うことは、意外性だと思います。引っぱってきて引っぱってきてその最後に、なるほどと唸らせるにはどうしたらいいのだろうと頭をひねるし、自分なりに一生懸命考えることです。

イタリア人はとにかく感動する天才なんですよ。日曜日の教会で「いいお天気ですね!」「なんてあなたは美しいんでしょう!!」と、とにかく感情を表に出すのです。私はそのイタリアで20代の成長する時を過ごしたことが大きいです。日本人はどうしても感情を閉じ込めてしまう。イタリアでの生活は感情を外に出すことを教えてくれた。舞台ではそれをしないとお客さんは満足しないのです。真剣勝負なんでね。黄色くて小さいつぶれた顔の東洋人が、それをしなければ次も呼んでくれませんのでね。そんな東洋人に伝統芸術がわかるのかという世界です。そういう人たちに負けないようにするには、人よりも工夫して学びながら自分なりの、自分しかできないものを、バランスを考えてやるのです。今だったらできるのに、といった事は人間な

らたくさんありますよね。でも勉強する過程で今できるベストのことをやってみる。今聞くと恥ずかしいものもありますが、当時はできることのベストをやっていたのだと思います。とにかく飽きさせないことが大事なのかなと思います。

——ピアノの音などは何かと全部メゾフォルテに聴こえて変化がなさすぎると思いますね。

**二神：**ただ楽器にはその楽器なりに別の思考があるので、それで時間がかかるのかなと。頭脳のほうでたくさんやらなきゃいけないことがあるような気がしますね。歌は感性が8割くらいかなと思います。感性のボタンを押してやればすぐ声が出ますものね。

教える側にもたくさん感性の引き出しがあれば良いですからたくさん経験することが大事なのかなと思います。

——声楽の場合の基礎はやはり発声練習なのでしょうか。

**二神：**いかに声を自分の意志どおりに使えるかってことで、ピアノも指が自分の意志どおりに動いてくれて、音が出せるようになること、それが基本ですね、音としては。歌は持って生まれた声は変えられないですけど、それをどこまでいろんな音色を見つけられるかというのは努力だし、オペラに限ると曲芸ですから高音が出なきゃいけない。ハイCみたいなものですよね。若い時はいかに安定して良い音色出すことができるか、ひたすらそんな世界に明け暮れましたが、歳をとってくるとそれはもうできなくなりますが、それに代わるものを探せばいいのかと。結局何かをパワーに替えればいいのですよね。音楽はいろんなことでパワーに替えることの技術があるので、そこは経験とともに変わっていけばよいのだと思います。とにかく人間は衰えますので、昨日とおなじ声が出せるには節制と努力をしなければいけない。出てると思っても多分出てない。そこは謙虚になって自分の声を聴かなきゃいけないと、気を付けないといけないと思います。

——梶山で教えていただいた5年間ありがとうございました。専門教育で教えてこられて後にこの教育学部で教えられたわけですが、こういった印象をお持ちでしょうか。

**二神：**生徒を見るととき必ず眼を見ることにしているのですが、この学校に来て最初に気が付いたことは、眼が輝いていてここはよい学校だと素直に思いました。だからここで5年間やってみようかなと思いました。たいてい話すと、今の学生は眼をそらすのですよ。でも梶山では邪心なく先生の顔を見ながら歌える人が多いです。

上達するポイントは聴く耳を持つということだと思います。先生や師匠の言葉を聴くことができれば進歩が速いと思います。ですからこの学生さんは話したら聴いてくれて進歩するだろうなと思いました。最初はどうやったらこの学生さんたちを導いていけるのかをつかむのに1年ぐらひは時間がかかりました。音楽の専門大学に来る学生は基礎がすでにできてきているわけですが、入学してから基礎を勉強しなきゃいけないというわけですから、そのような4年間のプランを考えました。それで次につながることを教えればいいんだと思った時に先に進めることができたと思います。プロの音楽家になれる人は少ないですし、教員になる学生が多いわけですから。私の役割は少しでも上を目指すことができる、むやみやたらにがんばれ！というのではしょうがないので、手助けができるのが我々の仕事かなと思いました。一番大事なのはよく観察しての学生の長所を見つけることだと思います。

——先生には合唱舞台を学生と作っていいいただいて、多くの方に観ていただいて喜んでもらい成果がありました。

**二神：**正直言って私は合唱得意ではないのですが、ここの学校では何人か集まると力が出せるという特徴がありますので、この合唱の場が学生たちを成長させることのできる場であると思いました。合唱を通じて力を伸ばせるかなと感じました。みんなで歌うハーモニーは素晴らしいんだと声をかけていました。

1回でも多くお客さんの前で歌う、それを肌で感じる事が大事な事なのでからチャンスを作って、コンサートの機会を作ってもらって合唱をできたことはすごく良かったです。

2020年12月19日：椋山女学園大学教育学部 宮田俊雄研究室にて